

Title	中英語方言と世界英語：方言多様性をめぐる中世と現代の往還
Sub Title	Middle English dialects and World Englishes : dialectal diversity in Middle and Present-day English
Author	堀田, 隆一 (Hotta, Ryuichi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2022
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.123, No.3 (2022. 12) ,p.19- 30
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	松田隆美教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01230003-0019">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01230003-0019</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 中英語方言と世界英語

— 方言多様性をめぐる中世と現代の往還<sup>1</sup>

堀田 隆一

## 1 はじめに — 方言多様性を示す2つの時代

とりわけ11世紀から15世紀にかけての中世後期、英語史の時代区分でいえば中英語期のイングランドは、方言多様性と多言語使用に特徴づけられる社会だった。当時のイングランドに生きる大多数の人々は英語を母語としていたが、現代の「標準英語」に相当する求心的な英語変種は存在せず、各々の話者はおぼろげに生まれ育った地域の方言を用いて暮らしていた。

このような英語諸方言の上に、1066年のノルマン征服を契機に大陸からもたらされたフランス語（主にノルマン方言のフランス語）が、王侯貴族のサークルを中心に（後に有力な市民にまで使用者層は拡大したが）用いられていた。さらにその上に、当時の西洋の国際共通語というべきラテン語が、一握りの宗教人や知識人によって用いられていた。イングランド社会の中上流層にあっては、このように多言語使用が日常だった。

しかし、中英語期を特徴づけていたこの方言多様性と多言語使用は、近代英語期に入ると少なくとも表面的には影を潜め、むしろ現代に連なる「標準英語」が生じて影響力を増していった。実際には、近代英語期に入ってからでも英語諸方言の使用や知識階級によるラテン語の使用は継続したが、英語標準化の進展とともに、方言と言語の多様性は表だって見えにくくなってきたのである。

時代は下って20世紀そして21世紀の現在、英語は随一の世界語に発展してきた。しかし、その発展に伴う言語的一様化の潮流にあらがうかのように、目下、世界中で様々な種類の英語が立ち現われてきている。英語史の観点から、これは方言多様性の復活とみることができる。世界的規模で多様化している英語は、近年、「世界

英語」(World Englishes)と呼ばれるようになってきており、英語変種の集合体を指す名称にとどまらず、英語の多様化の現象そのものや関連する研究領域を指す用語として頻繁に用いられるようになってきた。

このように、中英語と現代英語には方言多様性という共通点がある。本論では、この共通点に注目し、現代英語の観点から中英語を振り返って後者を現在化し、中英語の観点から現代英語を眺めて後者を歴史化することを試みる。英語の方言多様性を軸に、中世と現代の間を往還する試みである。

## 2 英語の標準化サイクル

本論では中英語と現代英語の方言多様性を比較し、異同を確認していくが、後の議論のためにまず英語諸変種をめぐる歴史を概観しておきたい。英語の歴史は端的に言えば標準化と脱標準化のサイクルを繰り返してきており、Greenberg と Ferguson によって提示された「標準化サイクル」(standardisation cycle) の仮説が参考になる。同仮説について Swann et al. より引用する。

... a regular historical process by which an originally relatively uniform language splits into several dialects; then at a later stage a common, uniform standard is established on the basis of these dialects. Finally, this variety will again split into regional and social varieties and the cycle will start again.

英語の標準化サイクルを図示すると図1のようになる (堀田, p. 107 より)。こ

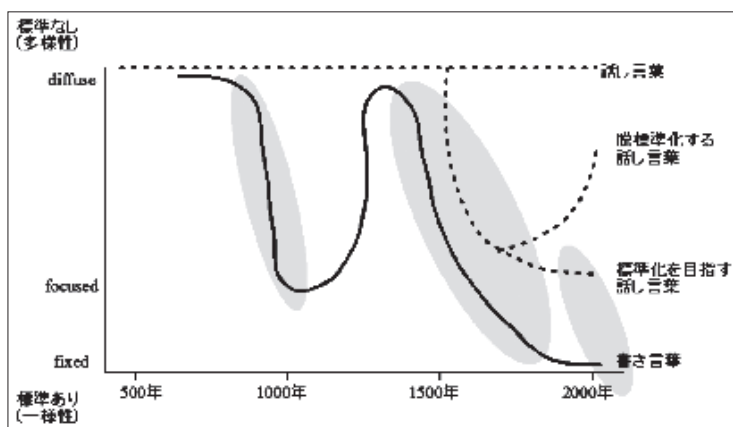


図1: 英語史における標準化と脱標準化のサイクル

のように英語の標準化の歴史は標準化サイクルの仮説に沿う1例とみることができる。<sup>2</sup>

### 3 中英語方言の概観

標準化サイクルの仮説を念頭に英語標準化の歴史を振り返ると、中英語期と現代英語期には方言多様性という比較対照すべき1つの特徴があることに気づく。

中英語期は Strang によって「方言的段階」と言及された通り、標準変種が不在のなか、イングランド各地で地域方言が花開いた。<sup>3</sup> この方言事情を端的に示すのは綴字の多様性である。例えば現代英語の through に対応する語の中英語の綴字は驚くほどの多様性を示し、15世紀の“Chancery English”のコーパスに限っても through, thurgh, þurgh, thorough, thorough, throu, thorough, through, thorwe, thorwgh, thorw, thorow, þorow, þorowe の14種類が確認される (Fisher et al. 392)。これがやや極端な事例であることは認めつつも、ほぼすべての語が方言によって複数の異なる綴字で書かれ得たことは事実である。中英語方言学では、イングランドの方言を慣習的に Northern, East Midland, West Midland, Southeastern, Southwestern の5つに区分することが多い。<sup>4</sup> 5つの方言区分を概観するために、6つの単語の綴字を取り上げ、イングランドの地図上に配したのが図2である (Lerer 92 を参照して作成)。

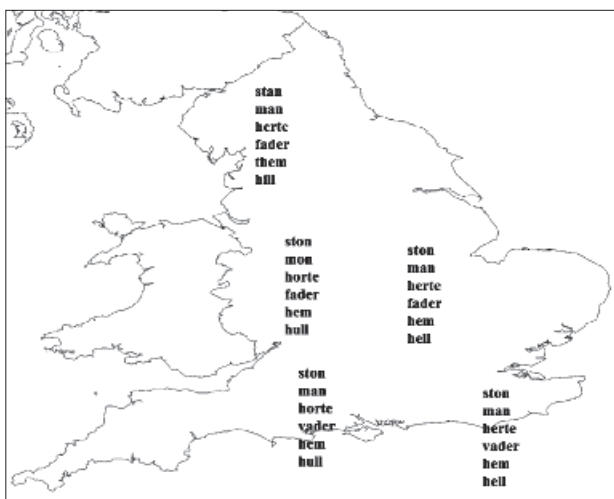


図2: 中英語方言と6単語の綴字

## 4 世界英語の概観

次に現代英語期における方言多様性, すなわち世界英語を構成する諸変種について概観したい。周知の通り, 英米の教養人の用いる英語を念頭においた「標準英語」が, 世界における英語使用の伝統的な規範とされているが, その周囲には多数の非標準変種が存在している。

英米両国内部でも様々な地域方言が行なわれてきたことはもちろん, スコットランド英語, ウェールズ英語, アイルランド英語, カナダ英語, オーストラリア英語, ニュージーランド英語など, ENL (= English as a Native Language) として多様な英語が確認される。一方, 英米の旧植民地の国・地域に典型的にみられるように, インド英語, シンガポール英語, 香港英語, フィリピン英語, ナイジェリア英語, ケニア英語, ジャマイカ英語などの ESL (= English as a Second Language) も種類が豊富である。

さらに世界のそれ以外の多くの国・地域では, 英語は EFL (= English as a Foreign Language) として広く学ばれており, 場合によっては独自の英語方言とみなし得るものが生まれてきている。例えば European English と称される方言を認めることができるように思われるし, 潜在的には Japanese English も1つの英語方言とみなし得る日が来るかもしれない。

このように見てくると, 現代英語期は中英語期に勝るとも劣らぬ「方言的段階」と呼べるほどの方言多様性に満ちた時代であることがわかる。概観を得るために, 以下に世界英語を構成する変種の一部を地域別に一覧する。

1. イギリス諸島：イングランド, スコットランド, ウェールズ, アイルランド
2. 北アメリカ：アメリカ, カナダ
3. オセアニア：オーストラリア, ニュージーランド
4. 南アジア：インド, スリランカ, パキスタン, バングラデシュ
5. 東南アジア：シンガポール, マレーシア, フィリピン, 香港
6. 南アフリカ：南アフリカ共和国
7. 西アフリカ：ナイジェリア, ガーナ, カメルーン
8. 東アフリカ：ケニア, タンザニア
9. カリブ海地域：ジャマイカ, バイア諸島, ブルーフィールズ, プエルトリ

モン

10. その他の地域：小笠原群島,ピトケアン島,ナウル,トリスタン=ダ=クーナ

## 5 2つの時代の相違点

前節までで,中英語期と現代英語期が,英語の方言多様性という点で比較対照し得ることを確認した.しかし,一口に方言多様性といっても,そのあり方や背景を探れば,そこには単純には比べられない点が多々ある.本節では2つの時代の相違点を検討し,各時代の方言多様性の特徴を浮き彫りにしたい.

(1) 最初に容易に思い浮かぶ相違点は,方言多様性が展開する空間の規模である.中英語期には英語方言の舞台はほぼイングランドに限定されていたといつてよい.スコットランド,ウェールズ,アイルランドにも部分的に英語社会があったにせよ,事実上,ブリテン諸島の南東部のみに英語の諸方言が分布していたといえる.一方,現代英語期における英語の諸方言は,世界中を埋め尽くしているとはいわずとも,世界中に散在している.あえて対比的に表現すれば,英語方言の舞台は,中英語にあってはイングランドであり,現代英語にあっては全世界である.

(2) 空間の規模と連動しているのが話者の人口と種類である.中英語では,英語諸方言の話し手は事実上イングランドにおける英語母語話者(ENL)に限定され,400万人に満たなかった(McDowall 47).一方,現代英語では,英語方言の話し手は世界諸地域における母語話者と非母語話者からなり,ENL,ESL,EFLを合わせて約20億人とも推定される(Crystal 62-65).

(3) 現代英語の方言の種類がENLに限らないのは,主に近代以降の英語の世界的拡大が関与している.これはある意味で中英語と現代英語が歴史の異なる段階にあるという定義上の差違に還元されるため,トリビアルな議論と受け取られるかもしれない.近代以降,英語は世界中でENL話者のみならずESL・EFL話者をも増やしていった結果,現代の世界語の地位に就くに至ったのであり,標準英語からある程度逸脱した英語方言がさまざまに発達したのも自然なことであった.とりわけESLやEFLの話者は各自の母語をもっており,その言語特徴が英語を使用するときにも引き継がれ,特異な英語方言が形成されてきた.このことは,ENL話者に限定されていた中英語の事情とは一線を画するように思われる.

(4) 空間の規模,話者人口・種類,非母語変種の追加と関係するもう1つの観点

は、英語に付与された威信の低さと高さである。中英語期の英語は社会的威信の低い言語だった。英語は後期中英語期の14世紀後半以降にようやくイングランドの国語としての地位を本格的に回復するに至ったものの、先立つ3世紀ほどの間、イングランドはフランス語による支配という言語的くびきの下にあり、その支配者たるフランス語のさらに上には、当時の国際共通語であるラテン語も鎮座していた。英語（諸方言）は、その舞台であるイングランドにあつてすら威信の低い言語であり、かつそこには標準英語なるものもまだ芽生えていなかったのである。

一方、現代の英語はそれ自身が世界で最も高い威信をもつ世界語であり、その上にはもはやかつてのラテン語のような支配的言語はない。威信の序列があるとすれば標準英語（上位）と非標準的諸変種（下位）という英語内部での序列にとどまる。これはかつてのラテン語（上位）、フランス語（中位）、英語（下位）という異なる言語からなる階層とは異なる次元の上下関係とってよい。

(5) 威信の有無や標準英語の有無と関連して、メディア（話し言葉と書き言葉）の観点からも、英語の方言多様性のあり方について、2時代間に対照的な点を見出すことができる。中英語では両メディアにおいて等しく方言多様性がみられたが、現代英語では方言多様性は話し言葉においてのみ確認されるものであり、書き言葉においては存在しない、あるいは少なくとも目立たない。現代英語においては、書き言葉の一様性はきわめて高く保たれている。

## 6 2つの時代の類似点

中英語期と現代英語期の方言多様性について5点の異なる側面を指摘してきた。(1)の空間の規模と(2)の話者人口・種類は数値化し得る客観的な指標であり、2時代間で明確に異なる側面とってよい。しかし、それ以外の3点については、見方によればむしろ2時代間の類似性すらを示唆する。今一度、慎重に比較対照の検討を加えてみたい。

前節の(3)で前提としていたのは、それぞれの時代の英語方言の形成史がまるで異なるということだった。差違を明示的に表現すれば、中英語の諸方言は母語話者の間での「自然の方言化」の結果であり、現代英語の諸方言は主に英米により植え付けられて多様化した「人為的な方言化」の結果である、ということだ。また、前者には非英語である基層言語の干渉がなく、後者にはそれがある、ともいえ

るかもしれない。

しかし、この差違は、一見してそうみえるほど明白ではない。中英語（諸方言）の形成史を考慮すれば、その背景には征服や侵略もあれば、非英語の基層言語からの干渉もあった。いな、英語史を概観すれば、英語は中英語期までにすでに豊富に言語接触を経験してきたのである。5世紀半ばのアングロサクソン人のブリテン島侵攻は、そもそもケルト系諸言語が行なわれていたこの島に英語を植え付けた出来事だったし、近年議論の盛んな「ケルト語仮説」(the Celtic hypothesis)に従うならば、後代の英語は先住民のケルト系基層言語の上に成立していたとも考えられる。<sup>5</sup>さらに英語は古英語期から中英語期までにラテン語、古ノルド語、フランス語など諸言語から濃厚な影響を受け、言語的に大きく変質してきた。イングランドの外を見渡せば、英語は中英語期以降、スコットランド、ウェールズ、アイルランドに帝国主義的な拡大を試み、近代英語期にはこれらの地域を ESL 地域化し、さらに現代までにほぼ ENL 地域化することにも成功した。英語の定着と新方言の形成という観点からは、例えば18世紀以降のアイルランドと19世紀以降のインドは十分に比較し得るのである。

(4)の言語的威信の観点からも、2時代間の比較は可能である。中英語では、少なくとも14世紀後半までは、いかなる威信変種も存在しなかったのに対して、現代英語では標準英語という威信変種が存在する。確かにその点は異なるのだが、威信の低い変種群、つまりヴァナキュラーどうしの混成から、新たな共通語・標準語が萌芽してきたというパターンは、サイクルのように繰り返されてきた。既存の「標準的な言語変種」（中英語期でいえばフランス語やラテン語、現代英語期でいえば標準英語）に取って代わろうとする勢力は、いずれの時代も英語のヴァナキュラーな諸変種だった。現代世界で顕著に見られるのは、インド、シンガポール、ジャマイカなどの ESL 国で、自らの英語変種の使用を少なくとも国内において認めようとする動きである。世界各地でヴァナキュラーの威信を高めていくための独自の戦略が展開されている。

さらに、そうしたヴァナキュラーどうしが国際コミュニケーションのなかで混じり合い、共通の部分集合となる言語項が選択され、角が取れて丸くなった「共通英語」が、とりわけ話し言葉において自然発生しつつあるといわれる。このような共通英語は WSSE (= World Standard Spoken English) や ELF (= English as a Lingua Franca) などの表現で呼ばれるようになってきている。いわば新興のヴァ



ナキユラー群が束になって既存の標準語に取って代わろうという動きを見せているわけだ。このような動きが今後どのように進行し、いかなる結果に至るのかは容易に予測できない。しかし、この過程そのものは、後期中英語以降に起こっていたことと類似しており、既視感がある。

(5)については、方言多様性がみられるメディアについて、中英語では話し言葉と書き言葉の両方が関係するが、現代では話し言葉にのみ関係する、と述べた。しかし、厳密に言えば、微細な点であることは認めつつも、現代英語の書き言葉においても方言多様性は確かに存在する。綴字の英米差はよく知られているし、句読法の慣習にも変種間で多少のヴァリエーションがある。また、現代では *lite* や *thru* などの発音に基づいた綴字も増えてきており、今のところ特定の（しばしばインフォーマルな）レジスターでの使用に限定されているが、話し言葉が書き言葉に与える影響は日増しに大きくなってきているようである。これらの綴字の変化や変異が、今後、インフォーマルのみならずフォーマルなレジスターへも拡大していく可能性はあり得るだろう。現代英語の書き言葉の方言多様性について検討することは無意味ではない。

最後に、中英語と現代英語の方言間における言語学的相違が平行的である点に目を向けておきたい。Mair (116) は、世界英語の研究者たちがおよそ合意している主たるトレンドとして3つを指摘している。

1. Accent divides, whereas grammar unites (with the lexicon being somewhere in between).
2. There is divergence in speech, but convergence in writing.
3. Variation is suppressed in public and formal discourse, but pervasive in informal settings.

このトレンドの1点目は中英語方言についても当てはまるだろう。なお、世界英語の多くの変種に共通する言語項は“angloversals”や“vernacular universals”などと呼ばれるが(cf. Siemund and Davydova 135), 中英語方言にも対応する概念・用語を導入することは検討に値する。

## 7 呼称をめぐる問題——Middle English “dialects” と World “Englishes”

以上の議論では英語の「方言」という用語をあえて多用してきた。しかし、「方

言」に相当する呼び方が、中英語を議論する場合と現代英語を議論する場合とで慣習的に異なっているという点を指摘しておきたい。

中英語については Northern dialect や Southern dialect のように dialect「方言」を用いるのが慣例である。ところが、現代英語の世界中の諸方言は British English, American English, South African English, Indian English, Nigerian English のように通常 English「英語」が用いられる。もし社会言語学的に中立的に variety「変種」という用語を使うならば、上に挙げたすべてが“XXX variety of English”という表現の型にはまるだろう。つまり、Northern variety of English, Southern variety of English, British variety of English, American variety of English, South African variety of English, Indian variety of English, Nigerian variety of English のようにである。しかし、慣例としては中英語では“dialect”を、現代英語では“English”を変種名称の主要部として用いている。つまり、ここには“Middle English dialects”対“World Englishes”という対立が見られる。これは2時代間の方言多様性に関する客観的な差違を示すというよりも、両時代の方言多様性に対する我々現代人の解釈の差違を示すものというべきだが、きわめて重要な論点だと筆者は考える。

中英語の Northern dialect や Southern dialect などの諸変種を束ねている扇の要は (Middle) English である、しかし American English, Indian English, Nigerian English などの諸変種を束ねている扇の要は何なのだろうか。(Present-Day) English とみるべきだろうか、あるいは昨今の潮流に乗っていうところの World Englishes というべきだろうか。World Englishes という呼称、および呼称の背後にある英語観は、近代以降の English が握ってきた既得権益を転覆し得る力をもっているように思われる。ヴァナキュラー群の下から突き上げるような力のことである。今後英語の方言多様性はどのような方向に向かっていくのだろうか。複数形のまま Englishes にとどまるのか、それぞれが散逸して American, Indian, Nigerian などの英語に由来する個別言語が発達していくのか、はたまたヴァナキュラーの混成のなかから新たな共通言語 ENGLISH が生まれてくるのだろうか。

## 8 おわりに — LALME/LAEME と GloWbE/eWAVE

最後に、中英語の方言の研究と現代の世界英語の研究に欠かせないツールの比較対照をもって、小論を閉じたい。中英語研究には LALME/LAEME という方言

地図が用意されている。最初に編纂された LALME は後期中英語の方言地図で、冊子体で出版された（後に電子版 eLALME も公開された）。次に初期中英語を対象とする姉妹版 LAEME がウェブ上で公開され、しかも対応する中英語テキストが電子コーパスとして提供されており、そこには主に形態音韻論的なタグが付されている。一方 GloWbE は世界の20変種の英語を収集したウェブ上の巨大コーパス（19億語を含む）であり、串刺し検索できる優秀なツールである。eWAVE は世界諸英語の統語論的情報を収集したウェブ上のデータベースである。

LALME と LAEME は姉妹編といわれるだけに仕様も共通するところが多く、ある程度の連携を図ることができる。一方、GloWbE と eWAVE は編纂者も異なり、もともと連携使用を意識して作成されたわけではない。また、LALME と LAEME は扱う時代は異なるが綴字や形態音韻論の重視という点は共通しているが、GloWbE と eWAVE は扱う時代こそ同じ現代だが注目点はそれぞれ語彙・語法、統語項目と相違している。

中英語方言の研究ツールのペアと現代世界諸英語の研究ツールのペアは、このように必ずしも平行的な関係にはないが、英語の方言多様性へのまなざし、個々のヴァナキュラーへの注目という点に関しては、驚くほど共通している。この共通点を意識しつつ両ペアのツールを使いこなしている英語史研究者は多くないだろう。これらのツールの存在は、筆者が本論で展開してきた中英語と現代英語の方言多様性が比較対照に値するという主張を静かに支持してくれているように思われる。中世と現代の往還の道を切り開くツールとなり得るのではないか。

## 註

- 1 西洋中世の文学・言語の多様性に常に関心を寄せられてきた松田隆美先生に敬意を表して。
- 2 ただし、標準化サイクルの仮説には注意すべき点もある。これについては堀田(113–15)の議論を参照。
- 3 “ME is, *par excellence*, the dialectal phase of English, in the sense that while dialects have been spoken at all periods, it was in ME that divergent local usage was normally indicated in writing. It was preceded by a phase in which the language had one kind of written standard . . . and followed by a phase in which it had others. It stands alone as having a rich and varied documentation in localised varieties of English, and dialectology is more central

to the study of ME than to any other branch of English historical linguistics.” (Strang 224–25)

- 4 ただし、言語研究者にとって方言区分は多かれ少なかれ恣意的な作業であり、目的に応じていくらでも細かく分けていくことができることを強調しておきたい。
- 5 近年、ケルト語が英語の文法に少なからぬ影響を与えてきたとする仮説をめぐって多くの議論がなされてきた。仮説の概要は Filppula and Klemola や Durkin (87–90) を参照。

## 参考文献

---

- Crystal, David. *English As a Global Language*. 2nd ed. Cambridge: CUP, 2003.
- Durkin, Philip. *Borrowed Words: A History of Loanwords in English*. Oxford: OUP, 2014.
- eWAVE = Kortmann, Bernd, Kerstin Lunkenheimer, and Katharina Ehret, eds. *The Electronic World Atlas of Varieties of English*. 2020. Available online at <http://ewave-atlas.org>.
- Ferguson, C. A. “Standardization as a Form of Language Spread.” *Language Spread and Language Policy: Issues, Implications, and Case Studies*. Georgetown University Round Table on Languages and Linguistics, 1987. Ed. P. Lowenberg. Washington, DC: Georgetown UP, 1988.
- Filppula, Markku and Juhani Klemola. “English in Contact: Celtic and Celtic Englishes.” Chapter 107 of *English Historical Linguistics: An International Handbook*. 2 vols. Ed. Alexander Bergs and Laurel J. Brinton. Berlin: Mouton de Gruyter, 2012. 1687–1703.
- Fisher, John H., Malcolm Richardson, and Jane L. Fisher, comps. *An Anthology of Chancery English*. Knoxville: U of Tennessee P, 1984.
- GloWbE = Davies, Mark. *Corpus of Global Web-Based English*. Available online at <https://www.english-corpora.org/glowbe/>.
- Greenberg, J. H. “Were There Egyptian Koines?” *The Fergusonian Impact*. Vol. 1. Ed. A. Fishman, A. Tabouret-Kellter, M. Clyne, B. Krishnamurti, and M. Abdulaziz. Berlin and New York: Academic P, 1986.
- 堀田隆一 「第6章 英語史における「標準化サイクル」『言語の標準化を考える——日中英独仏「対照言語史」の試み』(高田 博行・田中 牧郎・堀田隆一 (編著)) 大修館, 2022年. 106–28頁.
- Jenkins, Jennifer. *Global Englishes: A Resource Book for Students*. 3rd ed. London: Routledge, 2015.
- LAEME = Laing, Margaret and Roger Lass. *LAEME: A Linguistic Atlas of Early Middle English, 1150–1325*. U of Edinburgh, 2007. Available online at <http://www.lel.ed.ac.uk/ihd/laeme2/laeme2.html>.
- LALME = McIntosh, Angus, Michael Samuels, and Michael Benskin, with Margaret

Laing and Keith Williamson. *A Linguistic Atlas of Late Mediaeval English*. Aberdeen: Aberdeen UP, 1986. Available online as eLALME at [http://www.lel.ed.ac.uk/ihd/elalme/elalme\\_frames.html](http://www.lel.ed.ac.uk/ihd/elalme/elalme_frames.html) .

- Lerer, Seth. *Inventing English*. New York: Columbia UP, 2007.
- Mair, Christian. "World Englishes and Corpora." Chapter 6 of *The Oxford Handbook of World Englishes*. Ed. Markku Filppula, Juhani Klemola, and Devyani Sharma. New York: OUP, 2017. 103–22.
- McDowall, David. *An Illustrated History of Britain*. Harlow: Longman, 1989.
- Siemund, Peter and Julia Davydova. "World Englishes and the Study of Typology and Universals." Chapter 7 of *The Oxford Handbook of World Englishes*. Ed. Markku Filppula, Juhani Klemola, and Devyani Sharma. New York: OUP, 2017. 123–46.
- Strang, Barbara M. H. *A History of English*. London: Methuen, 1970.
- Swann, Joan, Ana Deumert, Theresa Lillis, and Rajend Mesthrie, eds. *A Dictionary of Sociolinguistics*. Tuscaloosa: U of Alabama P, 2004.